

まちのひろばフェス 2020

これからのコミュニティ活動を考えよう～with コロナ、after コロナ～

出演者：NPO 法人 CR ファクトリー 呉 哲煥 代表理事

Vege&ArtFes 中村 ふみよ さん

オーベルグランディオ川崎自治会

川崎市職員 PJ チーム（鈴木、工藤、前田、宮下）

株式会社石塚計画デザイン事務所 千葉さん、小林さん

川崎市市民文化局コミュニティ推進部（阿部、藤井）

藤井：はい、皆さんこんにちは。

これより「まちのひろばフェス 2020 これからのコミュニティ活動を考えよう～with コロナ after コロナ～を開催します。本日の進行は私、川崎市役所協働・連携推進課の藤井と、そして

千葉：石塚計画デザイン事務所の千葉です。

二人：よろしくをお願いします。

藤井：この2人で進めたいと思います。オンラインが初めての試みで色々トラブルもあろうかと思いますが、よろしくお願ひいたします。

それでは私の方からイントロダクション、さっそく始めたいと思います。

はじめに連絡およびお願ひ事項になります。

このイベントは2時間程度を予定しています。途中で休憩を挟みます。

またYouTubeでライブ配信を行っています。こちらは後日、市のコミュニティチャンネルにアップします。

また写真撮影があります。あわせてご了承下さい。

藤井：このイベントの開催趣旨について簡単に説明します。

イベントタイトルにもあります「まちのひろば」ですが、これは川崎市が進めているコミュニティ政策における概念の一つです。川崎市では「これからのコミュニティ政策の基本的考え方」に基づき、地域レベルの取組として「まちのひろば」づくりを進めています。このほかにも「まちのひろば」を支える区域レベルの取組として「ソーシャルデザインセンター」などもあります。

今日は時間の関係でそのすべてをご紹介できませんが、この基本的考え方の本編や取組などは市のホームページから検索できます。YouTube をご覧の方は概要欄にリンクを貼っておきます。

さてこの基本的考え方の中では「まちのひろば」の機能として「出会いの場」「地域の居場所」「サードプレイス」など、いくつか例示していますが この「まちのひろば」のことを「多様なつながりを育む地域の居場所」としています。

この多様なつながりとはどのようなものでしょうか。こんな話があるのを聞いたことがあるかもしれません。ヤマアラシのジレンマというドイツの哲学者ショーペンハウアーの寓話です。この愛らしい不思議なキャラクターがヤマアラシという動物です。彼らは針のような毛を持っています。ヤマアラシは寒いときにはお互いに体を寄せ合いながら暮らしていく必要があります。ところがヤマアラシ同士が体を寄せ合おうとすると、当然その針のようなトゲでお互いを傷つけてしまいます。生物学的な審議のほどは分かりませんが、このお話はつながり方の機微について上手に表していると思います。

つまりガッツリつながる、さもなくば関係を断つどちらかということではなく、その間にその人が心地よいと感じるちょうどいい塩梅のつながり方があり、その形は多様であると思います。それは寛容であり包摂的であるとも言えます。

そうした多様なつながりを育む「まちのひろば」とは、硬くてしっかりしたものだけに限らず、柔らかく

てホッとできる心理的な安心感や気軽な楽しさといった効用もあるものと考えています。

基本的考え方ではその概念は幅広く、例えば3人集まれば「まちのひろば」が展開し創発につながるという考え方と説明しています。こうした「まちのひろば」は 実は日々暮らしている中に数多くあります。色々な「まちのひろば」を見つけるヒントやキーワードもこの基本的考え方の中に示されています。

皆さんの身近な場所にはどんな「まちのひろば」がありますか。まちのひろばフェスはこうした多様な「まちのひろば」を見つけるイベントです。昨年は多様な「まちのひろば」の探求にはじまり、地域共生食堂としてのこども食堂の可能性、さらに子どもが安心していられる居場所についてバラエティに富んだ内容で3回開催しました。

ところが今年は皆さんもご存知の通り、いわゆるコロナ禍の影響が今なお残っています。そんな状況下で実際の地域活動はどうなっているのでしょうか。一つ事例を見てみましょう。とある町内会のリアルということで、これはイベントタイトルのフェスに寄せて「とある」と「リアル」で韻を踏んでみました。フェス感出てますでしょうか。この町会は私が役員をやっている町会です。そういう意味でも等身大のリアルです。この町会では毎年4月に総会を行い、決算承認や予算体制などを決めており、町会にとっても重要な行事であります。それが今年中止となりました。この頃は感染者数の増加が続いている状況で町会としても苦渋の決断でした。さてこの町会ではゴールデンウィークの時期に地域の小さな防災公園で炊き出し訓練を行っています。かまどベンチを使ってアルファームでトマトリゾットを作ったり、流しそうめんなどの遊びも入れながら、訓練だけでなく町会員同士の親睦を深めるイベントでもあります。これも中止となりました。ちょうど緊急事態宣言が延長されたときのことで。この町会では9月にお祭りがあります。お神輿や子どもの山車などが商店街などを回ってお祭り気分を盛り上げています。この祭礼は町会行事の中でも一大イベントとなっていますが、この祭礼についてはどうでしょうか。残念ながらこれも中止となりました。お神輿を担ぐには密着することが避けられないので仕方のないことかもしれません。お祭りはお神輿を担いでいるときだけではありません。子ども向けのお菓子を用意したり神酒所の設営といったお祭りの準備や、終わった後の打ち上げなどでの何気ないやりとりが実は交流の場として機能していたりもします。この大切な交流の機会も中止です。打ち上げの乾杯がなくなりとても残念です。残念な気持ちのまま町会は秋の防災訓練や地区の運動会の季節を迎えます。こうした行事も当然即中止です。中止の嵐となっています。何でも中止となる中こんなつぶやきが聞こえてきます。このまま何もできないいいの？こうしたつぶやきもあり少しずつ変化の兆しもあります。例えば定例の役員会では人数を絞り時間もコンパクトにしながらか席のレイアウトも工夫して小さいながらも開催できます。当然マスク・消毒が必要です。今でも印象的なのは緊急事態宣言解除後の6月、初めて役員だけで集まったとき、普段はそんなことを感じたりしないのですが、集まることのありがたみというか大げさだけどよくぞみんなご無事だと涙がちょちょぎれそうになりました。たった1・2か月程度の間にもこうやって集まるのが懐かしいというか、ずいぶん遠い昔のようにも感じられ、またみんなのマスク姿が見慣れないのもあり、色々不思議な感じがしたのを覚えています。また路上清掃や歳末夜警「火の用心カチカチ」みたいなアレですね。こういうのも屋外で密にならないように工夫すれば実施できると思っています。

先ほどのスライドにあったつぶやきです。このつぶやきから更に一步進んでこんな声が聞こえてきます。こんなときでもできることがあるのかもしれない。でも一体全体どうやって？

この事例は町会の事例でしたが、この声は必ずしも町内会だけのものとは限りません。市民活動団体やサークル、学校の部活など、すべての方に共通している声だと思えます。

話が長くなりました。この後のタイムテーブルです。第一部では「これからのコミュニティ活動 with コロナ after コロナ」と題した講演会、その後5分程度の休憩を挟んで、第二部はご覧のゲストスピーカーの方々を交えた豪華トークセッション、最後に参加者の皆さんからの質問タイムも用意して、全体では15時半の終了を予定しています。最後の質問タイムでは、講演やトークセッションを聞いて疑問に思ったこ

とだけでなく、普段の活動等での悩み、また逆にこうやって工夫しているよなどといった声も、みんなでシェアしながら進めたいと思っています。フェスらしくコール&レスポンスしたいと思っています。オンラインの方はズームのチャット機能で、会場の方はお手元の付箋にご記入ください。記入の時間は特に用意しておりませんので、お話を聞きながら適宜ご記入してください。

それではお待たせしました。ここから第一部のスタートです。講師である呉さんの簡単なプロフィールを紹介します。呉さんは2005年にNPO法人CRファクトリーを設立し、すべての人が居場所と仲間を持って心豊かに生きる社会の実現をビジョンに様々な組織へのセミナー・コンサルティングを多数提供。またコロナ禍においても団体等の活動が停滞しないよう様々な視点からのセミナーを行っておられます。

それでは呉さん よろしくお願ひいたします

呉 : はい、ではさっそくですが、私 CR ファクトリー呉の方から、このフェスの最初の基調講演という形でお話をさせていただきたいと思います。皆さんミュートのままで結構です。「皆さん、こんにちは」

この「こんにちは」が返ってこないのもね、またなんか with コロナ時代なオンライン時代な感じはしながらも、最初の30分ほどの時間を使わせていただいて、私の方からこれからの市民活動、あるいはコミュニティ活動についてお話をしていきたいと思っています。今日お集まりいただいた皆さん、Zoom上の皆さんも会場の皆さんもそれぞれ様々な状況とか、あるいはお気持ち、そして今日参加する動機がおりだと思ひます。全部に対して包括的な話っていうのはなかなか難しい面がありまして、この半年間私たちにに見聞したり、実践をしてきた様々な取組とノウハウをですね、オンラインについてもそうだし、あるいはリアルについても含めて少し大きな視点からお話を差し上げたいと思ひます。

二部の方では具体的な事例を通して、またトークセッションという形で具体を揉んでいきたいと思ひますので、私の方からは、この半年間 with コロナ時代のコミュニティ活動というところでお話をしていきたいと思ひますので、ぜひ気軽に色々メモなども取りながら聴いていただければなと思ひます。

ではちょっと画面の共有をしながら話を進めていきたいと思ひます。今日はこれからのコミュニティ活動というテーマで with コロナ、そして私なりに after コロナですね。その先についても少し言及していきたいというふうに思ひますので、全部が全部ですね、ためになるとか参考になることにはならないと思ひますが、ここの部分はすごく参考になったなとか、ちょっとヒントになったなみたいなどところをつかんでいただけると嬉しいなと思ひます。

最初に自己紹介を簡単にさせていただきます。私はNPO法人CRファクトリーという団体の代表をしています呉と申します。2005年に立ち上げたNPOで、今15年経ったNPOです。この赤いところのNPO・市民活動・サークル運営者向けのサービスというものを15年、長年提供してきました。Facebookをやっていますので、もしよかったら友達になってねということで、この呉っていう名前はなかなか珍しいので、検索していただくと出てくるかも知れませんがぜひ探してみてください。

CRファクトリーという団体、どんな活動をしているのか簡単にご紹介します。今日本の社会は社会課題先進国日本と呼ばれています。今からお伝えする内容は、皆さんにとっても関心があったり、そこをテーマに活動している団体もあると思ひます。自殺者が2万人、これ昨年なんと2万人をきって1万人台をいきました。今年度はどうなるのでしょうか。8月9月の自殺者が今増えている、そういうニュースも入ってきいたりします。躁うつ病患者数は年間120万人くらいいたりします。これ測定が難しいんですけども、孤独死という亡くなり方をする方が年間3万人ほど、3万2千人などと言われていたりします。児童虐待の相談件数は今13万件、最新のデータだと16万近くまで上がっています。こちらはもう30年近くずっと上がり続けている数字です。ニュース報道も最近増えていますね、皆さんの中でも非常に心を痛めていたりとかご関心ある方もいるんじゃないでしょうか。ニートと呼ばれる若者は57万人いて、相対的貧困率は16%、こども食堂という活動をされている方も今日のご参加されている方の中にもいるかも知れませんが、このあたりのデータに基づいて市民活動が生まれてきているというところもあると思ひます。不登

校の子どもたちは13万人、川崎市は3月5日でしたかね。学校が休校措置になって5月31日まで約3か月、うちの息子も小学校6年生ですけれども休校になりました。このオルタナティブな不登校というもの13万人、今14万人に増えようとしていますけども、こちらも非常に今関心の高まっている問題の一つかなと思っています。こちらは社会課題ではないですが日本の高齢化率は28%、国勢調査が今年行われましたので更に詳細な数字が出るのではないのでしょうか。そしてこちらも社会課題ではありませんが、生涯未婚率ですね。50歳までの間に結婚しないということを生涯未婚と定義していますが、生涯未婚率、男性は今23%までできていたりします。

このような社会課題、この30年から40年の中で特に際立って目に入ってくるようになった社会課題、これらの社会課題をですね、皆さんの中でもご関心がある方多いのかもしれないかもしれません。私たちはこれに対してどういうふうなアプローチをしていこうとしているかという、これらの自殺・うつ・児童虐待・孤独死のような社会問題、社会課題を何とかしたいなって強く思っています。これらは孤立にまつわる社会課題なんじゃないかなと感じていて、これらの社会課題がなかなかなくなる、あるいは未来に向けて増え続けてしまう、そこには社会構造に要因があるんじゃないか、というふうに私たちは着目をしています。今緑色のアニメーション出てきましたけれども、つながりの希薄化だったりとか、コミュニティの弱体化であったりとか、孤立・孤独・無縁、このような社会構造がもしかしたら自殺とかうつとか児童虐待とか孤独死、そしてそこにまつわる家族というもののしんどさ、生きづらさというものをつくっているのかもしれないというふうに考えているわけです。

私は26歳の時に会社を辞めて独立をしてこの活動に身を投じてきました。少し青臭いですけども人と人とのつながりがあるという地域あるいは社会、一人ひとりが愛着あるコミュニティがあって保っているという地域社会、そうなったときに、その社会構造が人と人とのつながりがある、あるいはコミュニティが豊かであふれている、あるいは共助・互助・支え合いみたいな構造に社会が、地域が、社会構造がなったときに、直接的ではないですけども、これらの孤立にまつわる社会問題が予防・軽減されるんじゃないかなというふうに思っていて、この社会基盤づくりをやりたいというふうに考えている団体です。

この話をした理由は、この後お話をする「どれだけコミュニティ活動が重要か」「どれだけ市民活動が大事なのか」、それは趣味のサークルのようなものや自治会・町会・PTA含め、そういう人々の活動というものが、結局つながりとか実はコミュニティとか、あるいは人や地域への愛着というものを育む、とても大事な大事な、なんていうのかな、媒介とかメディアとか器になっているからなんですね。そこをつくることこそが、もしかしたら暴力だったりとかDVだったりとか児童虐待とか、あるいは不登校のような問題を緩和していく大事な大事な解決策になるんじゃないかなというふうに考えていて、だからこそNPOはすごく大事だし、市民活動はすごく大事だし、コミュニティ活動・サークル活動、自治会活動はすごく大事だというふうに私は考えています。だからこのwithコロナ時代においても、いかにして不要不急ってことと言われてしまう部分もあるかもしれませんが、いかにしてリアル、あるいはオンラインで活動をして、人が会話とかコミュニケーションして出会ってつながっていくのか。そこをととても応援したい、支援したい、つくっていききたいというふうに思っているそんな団体と私になります。ということで、詳しくご関心持たれた方はホームページなど見ていただければと思いますが、私たちは居場所と仲間そしてあったかいコミュニティというキーワードで活動している団体になります。

でははいよいよwithコロナ時代の団体運営ということで、withコロナ時代のコミュニティあるいは活動というものについて、この半年間色々考えてきたことを今回このスライドの中に込めていますので、ぜひ聴いていただきながら色々ヒントを得ていただければ嬉しいなと思います。

まず最初、リアルなイベントやミーティングができないということですね。新型コロナウイルスの感染拡大により世の中は三密を避けなければいけない状況となりました。「三密」は今年の流行語大賞を取るんじゃないでしょうかね。それくらいあの今までなかった言葉 密閉・密集・密接、子どももね、なんかこ

れを唱えられるようになるくらい三密という言葉が世の中に出てきました。私たちにとってはものすごい逆風です。なぜならコミュニティ活動は三密を非常につくる活動だからです。イベント・場づくり・交流などを主活動とする多くの市民活動・コミュニティ活動にとっては、ものすごくやりづらい状況になってきました。

コロナ時代に起きていること、やっぱりリアルなイベントが開催できないとは言えないが、開催しづらくなりましたね。リアルなミーティングもやりにくくなりました。今までだったらカフェとか市民活動センターとか、あるいは集会所とか会議室に集まってやっていたミーティングがすごくやりづらくなった。その後の飲み会とかランチとかも行きにくくなりましたね。

三つ目、高齢者の感染に気をつける必要があるということで、ここは今も変わらないでしょう。私の母は80歳です。日々のニュースを見ている、やはり高齢者の重症化リスクはやっぱり高いので、今重傷者もすごく減ってきていて、その数字を見て私はすごく落ち着いたり安心はしていますけれども、やはり高齢者に関しては感染に気をつける必要があるなというふうに思います。

四つ目、これ皆さんの事前のお悩みの中にも書いてあった、入っていた内容になりますが、リアルな場をつくることへの認識の差ですね。いいよ会おうよって、ミーティングやればいいじゃんっていう人もいるし、いやまだリアル怖いよね、オンラインにしようよとか、活動を一旦ちょっと休止しようよっていう人もいたりする。どっちが正しいかは分かりません。ですが認識に差が出ていることはほぼ間違いありません。全国のいろんな人たちの声を、市民活動・コミュニティ活動している人の声を聞いてきましたけれども、やはりこの認識の差っていうのがかなり厄介な敵というか、ものになっているなというのはすごく感じます。リアルやればいいじゃん、イベントをやるよ、ミーティングをやるよっていうそういう考え方と、いやいやまだリアル怖いよっていう考え方、どっちが良い悪いじゃなくて、認識の差が非常に活動を苦しめているなというのはすごく感じますね。そして今日も少しオンラインのコツみたいな話もしますし、第二部でもオンラインの取組も出てきますが、IT・オンラインの得意、逆に苦手、その差が団体ごとにもありますし団体の中でも得意・苦手に差があるというところがあるかなという気がしています。

私たちは4月5月に緊急アンケートを取りました。NPOや市民活動やサークル活動をしている皆さんに何が困っているのか実態調査を行いました。そこで以下三つの項目が主に浮かび上がってきています。一つ目、やはり多くの団体や活動の中で日常会話や普段の何気ない雑談が減っているということですね。皆さんどうですかね、雑談減りましたかね。これ、減りましたね。何気ない雑談が今までだったら電車の行き帰りとか、あるいは何かご飯食べた後の帰り道とか、なんかちょっと早めに会議室に来たときのその前の最近どう？という話ができていたのが、そういうものが非常に減ってしまっている。そもそも会えていないっていうこともあるし、この後お話しするオンラインでは、やっぱりこの雑談がすごくしにくいということがありますね。さらに対話や議論やディスカッションがなかなか深まらない。今日もZoomでお伝えしていますが、この対話とか議論ディスカッションがオンラインだとなかなか深まらない。あとこれなかなか深刻なんです、関わりの差が生まれている。ミーティングなどをオンライン化することによってですね、やはりオンラインにアクセスしやすい人とか得意な人とか好きな人はよく参加しやすいけど、オンラインにアクセスすることができないとか苦手とか嫌いっていう人がなかなかアクセスできないということがあって、コロナ前の組織の雰囲気とか関係性が、コロナ自体というかコロナによって会う機会が減ったり、オンライン化することによって一人ひとりの関わりの差が出てきているっていうところに頭を悩ませている代表・リーダー・運営者もいるなというふうに感じています。

普段、我々が無意識に獲得し合っていた非言語の情報が減ったことによって前提のズレ、相手の意図・考えが理解しづらくなるみたいなことが起きています。それは活動・仕事の進め方・成果にも悪影響を及ぼし始めて、人間関係がぎくしゃくしたりとかストレスを感じる場面もあるかもしれません。雑談やランチで得ていた気晴らしやぬくもりも減ってきてしまったということがあるのではないのでしょうか。皆さんど

うですかね。ちょっとだけ悲しい後ろ向きな話をすると、やはりこの半年間ですごく団体内の関係がぎくしゃくしたという話もやはり聞いたりしますし、それによって団体が分割というか割れてしまったという声も残念ながら聞く場面もあつたりします。皆さんの団体はどうでしょうか。ここに向けて私は一つ解決策というか提案があつたりするので、それは後でまた話したいと思います。

私たちはこのコロナ禍においてワークショップを何回も行ってきました。それはやはり何が起きているのかをちゃんと把握したかったからです。NPOとか市民活動とかコミュニティ活動の現場で何が起きているのか、2か月に1回ぐらいの頻度でワークショップを行って来ました。聞こえてきた声、ちょっと重なりますけども、オンラインへの拒絶感や格差があるので対面だけでもできないし、オンラインだけでもできない。この認識の差ですね、認識の差がある。集まればいいんだよって言う人もいるし、集まるのが怖いって言う人もいたりする。この何回もワークショップを4回ほどやってきて、とても象徴的なキーワードはやっぱりこの温度差・認識差ですね。ここに多くの団体が戸惑いを感じているというのは、間違いなく言っている一つのキーワードかなと思います。まちづくりの活動グループにはどう続ける？辞めようか？という声も出始めている。イベントのメインは交流や雑談だと思っているが、それがオンラインだとかなり難しい。悩みが言いつらい環境になっている。悩みや不満が見えにくくなって掴みづらい、見えづらくなっているっていうのもコロナ独特だなというふうに思います。いろんな人と話をしている、課題が見えなくなっている、悩みが見えなくなっている。見えているものは助けられるけど、家にどうしても閉じこもってしまう。それは高齢者だったりとか様々な事情で、なかなかその事情とか課題とか声が見えづらくなっている。これも非常にコロナ時代の一つの大きなポイントかなと思います。

モチベーション・帰属意識が低下している、こんな声がいろんな団体から寄せられていたりします。

この半年間コロナの中で見てきて、私は大事なことが三つほどあると思います。ちょっと今からその話をします。

オンライン時代は今まで自然と無意識に共有・担保されていたものに目を向けて、それを意図的につくるのが大事だよということですね。この話を聞いて当たり前だなんて思う方もいれば、確かにそこに目を向けてないなという方もいるかもしれません。改めて、私はコロナ時代はこのあたりに目を向けることがとても大事だと思っています。

一つ目は前提・背景のすり合わせ。その人が考えていることや疑問・違和感を感じていること、今どんな気持ちで仕事以外のこと、プライベートはどんな状況なのか。活動を前へ進めたいし、下半期に入って年間計画とか事業計画・活動計画、場合によっては予算も含めて動かしたいという気持ちも当然ある。このままずっと、先ほど藤井さんの最初の話にあつたとおり、このままでいいのかっていう思いはある。でもやはりメンバーが今何を考えていて、何を感じているのか。気持ちだったりとか仕事以外、つまり活動以外の面も含めたその前提とか背景のすり合わせを丁寧に行うということが、長い目で見たときにやっぱり活動の推進にプラスになるんじゃないかなというふうに思っています。

似たような話で関係性をあたためることですね。忙しい孤立しやすい構造のリモートワーク時代には、この支えと安らぎの人間関係が大事になってくるんじゃないかと私は考えています。活動を前に進めるということも頑張りながらも、やはり一人ひとりの気持ちとか、それを支えるとか、あるいは人によると思いますけども、コロナの中でなんとなく気が晴れないとか、ちょっと本調子じゃないなっていう人がいる中で、安らぎとかほっとする感みたいなもの、それをどうつくれるかということもとても大事だと思いますね。ちゃんと前に進む成果・スピードとメンバー間の関係性ケアのバランスを取ることがマネジメントだろうと思います。私も比較的そのタイプですけども、リーダーとなるとどうしても活動を前へ進めようと頑張ってきたくなる部分がありますが、もう一方でちゃんとメンバー一人ひとりに寄り添っていくような、ちょっとだけお話をするような、気持ちを確認するような、そういう姿勢とコミュニケーションがコロナ時代はすごく大事ななというふうに考えています。

最後に、気持ち・弱さを共有するということが、その人の気持ち・感情を共有できるチームになっていくということ。人間性を仕事に呼び込むというのは、今流行りのティール組織に書いてあることです。心理的安全性というのは Google が提唱した有名な考え方です。今こそ私のとても強くそして個人的な提言なんですが、今こそやはり前提・背景のすり合わせ、関係性をあたためる、気持ちを共有する、こういうマネジメントがコミュニティ活動・市民活動にとっては大事なんじゃないかというふうに思います。遠回りに見えるしまどろっこしく見えるかもしれないけれども、やはり今いる仲間とか、これから少ないかもしれないけれども入ってくる人たちとどう気持ちを通じ合わせ寄り添っていくのかということがとてもとても今は大事だし、それが来年度とか after コロナに向けての基盤になってくると思いますので、ぜひね横の人、気持ちみたいなところに目を向けていくことは大事だなというふうに思います。

続いてオンライン時代のキーポイントということについても少しお話をしておきたいと思います。3月ぐらいから、コロナが本格的になったあたりから私たちも相当オンラインのミーティングとイベントを、もうかなりの数やってきました。この後、第二部でご登壇される団体の皆さんもかなりオンラインで活動される場所も多いでしょう。私なりの見立てを三つお話しします。

一つ目、少人数、1対1、個別というのがキーワードです。オンラインで Zoom とか Google Meet とか LINE・ビデオ通話など色々あると思いますが、Zoom などのオンラインツールは、やはり大人数にあまり向いてないというのが半年やってきての私の大きな感想です。だからこそ少人数をいかにつくるかが鍵だと私は考えています。オンラインは3人とか4人とか、1対1の2人とかっていうのにすごく向いていて、今活動がなかなか前に進まないどうしようって少し停止している場合には、少人数や個別で温度や関係性をあたためていきながら、いきなり10人20人で何とかしようとしなくて、やっぱり一人ずつ温度を上げていくようなマネジメントが、再スタートというか再興にとってはとても大事なんじゃないかというふうに思います。

二つ目にオンラインの良いところは、やはり集まるコストがものすごく低いところですね。短い時間で頻度高くがコツだと思います。移動しなくても済むオンラインミーティングは隙間時間の短い時間の実施がやりやすい。今までは、場合によってはですよ、30分とか45分、1時間かけて移動して、そしてどこかの施設だったりとかカフェだったりとか、お店だったりファミレスだったり、そういうところに集まってミーティングを例えば1時間とか2時間して、また30分とか1時間かけて帰るみたいなことをやっていたかもしれませんが、ですが、その移動がなくて自宅からですね、30分だけちょっと話そうよとか再来週のイベントのこの点についてちょっとだけ話そうよっていうことがすごくしやすいですね。短めのミーティングや面談を頻度高くやるのがやっぱり良いかなって気がするので、今までのように2時間みんな8人でギュッと集まってしっかりとミーティングをするということをも月1回やるよりも、30分とか1時間みたいなショートなミーティングを例えば2回とか3回やる方が、オンライン時代は向いてるなというふうに感じています。

そして最後は高齢者の IT リテラシー、IT のスキルというところに関しては私たちもかなり声を聞いて直面をしていて、正直なところをどうしたらいいだろうかということは、かなりまだ正解が見えておりません。ですが一つ声として見えてきているのは、やはりこの手ほどきが大事というかですね、オンライン化支援、IT ツールの手ほどきですね。通信環境と端末整備はこれからまた一年半ぐらいかけて進めていくべきだというべきでしょう。加えて IT ツールへの抵抗感がある方への個別でリアルな手ほどきがポイントになる。これは実際に高齢者の方が多く活動している方とか高齢者の方から聞いてみて、いくつか声が集まっている中でなんとなく見えてきていること。それはやはりやり方を教えるとか環境整備するっていうだけじゃなくて、信頼できる誰かから手ほどきを受けるみたいなことが、結局家の中にタブレットを導入するということがやっぱりつながりやすいだろうなと。〇〇さんがこんなに丁寧に教えてくれるんだからといって、ちょっとオンラインの Zoom のようなものをつないでみるみたいなことが起きるということは

聞く話だったりしますね。今の政権でオンライン診療の恒久化の話も出てきています。これからは医療や福祉においてもやはりこのタブレットがあるということ、パソコンがあるということはとても大事な時代にどんどんなっていくでしょう。コロナだったときだけじゃなくて、長い目で見たときに、やはりオンラインで診療を受けるとかオンラインで何かコミュニケーションをとるっていうことが、オンライン規制なんか非常に言葉として出てきましたけども、高齢者でITがあまり得意じゃないなっていう人にどうするかって、今渦中ですごく私も含めて悩んでいます、長い目で見たときはやっぱりこの道をちょっとずつでいいから進んでいくべきだなというふうに思っている、そこをうまく手ほどきをしていくこと、整備を進めることが大事かなというふうに思います。

今ちょっとオンラインにした場合のコツみたいな話を少ししてきました。最後になりますが、これからの活動をどう進めるかということについて話をしていきたいと思います。これからの活動をどう進めるか、まずオンライン化をどう進めるかですね。ここは簡単に観点だけ提供しておきます。オンラインのコミュニケーションやケアや会合ができる環境づくりですね。オンラインでもつながるための仕掛けづくり、ここは得意・苦手・諦めたとか、いやちょっとどうしようかな、色々あると思いますが、あえて強めの提案をすると頑張りたい、頑張らしましょうよっていうふうに私は言いたいです。Wi-Fi・タブレットなどオンライン環境の整備をどう進めるか。オンラインでのミーティング・面談、ちょっと励ましっぽい言い方になりますけど、やっぱり慣れればできる、やればできるなっていうのをすごく思っています。

オンラインのイベント場づくりの開催、今私たちはかわさき市民活動センターさんとの連携でこちらの写真に写っている「みやまえエコー」という翻訳ボランティアの活動している人たちの勉強会・講習会、そしてミーティングのZoom支援を伴走支援でやっています。皆さんZoomなんて使ったこともないという方がほとんどの15人近くの皆さんが、みんな今Zoomでミーティングをしたりとか勉強会・講習会に参加されたりしています。大きな大きな変化が起きています。高齢の方がとても多いのですが、やはり思いがあって専門性のある人がちゃんと伴走支援で入っていくと、こうやってもう活動できないかな、今年はとか来年もどうかなと思っていた団体がちょっとずつ活動を始めていたりします。今写真を出したのは「やかん寄席」というこちらが私たちが今支援させていただいている落語をやっている団体です。高齢者向けに様々な法律知識とか詐欺行為とかですね、成年後見制度のような、そういうものを面白落語で伝えるという活動している団体です。この団体も今まではずっと小屋を借りてやっていたんですけども、それをYouTube Live配信に切り替えるということでやっていたりします。皆さんの団体はどうでしょうか。もうオンラインに少しずつ移行してますでしょうか。もうオンラインなんか無理だよ、リアルしかないっていうこともあるかもしれません。一つオンラインどうするかということも考えてみてはどうでしょうか。コロナは長期戦です。あと1年半くらい続くんじゃないかと私は考えています。やるもやらないもどちらもありかなというふうに思います。もしやるという意欲と何か見通しがあるならば、是非オンラインも考えていきたいですね。

そしてリアルな場をどうつくるか。これも第二部のところで話がありますが、感染対策の徹底、信頼感・安心感のあるリアルな場づくりをどこまでできるか、工夫してリアルもつくりたいよねということですね。事前にいただいたお悩みの中にも、やはり活動場所の利用制限で活動が再開できない、開催できない、活動が休止中、開催できないという言葉が皆さんの悩みの中にすごく並んでいます。この9月10月あたりはだいぶ収まってきましたね。今少しずつ北海道や東京も上り調子で、この後どうなるか予断を許しませんね。ですが、半年経っていろんなことが分かってきました。私は感染症の専門家ではないので適当な発言は控えますが、やはりこの換気が大事だということは何となく多くのニュースを見てすごく思うところです。あと飛沫ですよ。なので、マスク着用とかフェイスシールド・マウスシールド、アクリルパーテーションの用意みたいなことによって、思いのほかリアルがつかれるということ。その雰囲気も最近は出てきているなという気がします。ちょっと笑い話ですが、私は個人でアクリルパーテーション3枚持っ

ています。ミーティングをするときに、マスクを外しながら少し飲食を伴ったミーティングをするときにそれを置くってことをしています。これ持ち歩いているんですよね。持ち歩いていてすごい変な人みたいになっているんですけども、アクリルパーテーション 1 枚だいたい 4~5 千円で買えて、それを三つほど買ってリアルを頑張っつけてつくっています。セミナーも最近リアルがちょっと増えてきました。マウスシールドとかアクリルパーテーション、そういうものもいくつか買うとすごく安く買えたりしますので、マスク着用はもちろんのことながら、もう少しリアルをつくるだけの準備もしていけるといいですよね。最後、一つ申し上げたいのが、あそこなんか安心感あるよねっていうその場づくりもすごく大事かなって気がします。やっぱり人によってその感度が違うので、1 回ミーティングに行ったけどちょっと怖いっていう、感染対策がちょっと不十分で怖いっていうところじゃなくて、ミーティングやイベント時に「あそこはなんか安心できるね」って「皆さんの感染意識も高いね」っていうそういう場づくりが大事かなという気がしますね。

そして最後です。リアルとオンラインのハイブリッドということで、with コロナ時代はリアルとオンラインを併用するハイブリッド運営を目指していったら良いんじゃないかというふうに考えています。ちょっとアニメーションでお伝えしますが、普段はミーティング・イベント リアルでやっていますよね。感染が拡大してきたら、そのミーティングやオンラインのフィールドをちょっとだけ変えてみます。オンラインに移行してみます。感染拡大したら活動が止まるっていうだけじゃなくて、やっぱり雨が降ったら傘をさして活動しようよ。そして感染が縮小、今この 9 月 10 月はちょっとそういう雰囲気に社会全体がなってきていますね。だったらリアル作りましょう。マスクしながらとか手指消毒しながらリアルなミーティング・イベントもやっていくということをやっとずつやっていく。これが感染状況あと 1 年半くらいおそらく続くと思うので 第 3 波のような盛り上がる時もあるかもしれないし平常に活動しやすいときもあるかもしれない。スイッチできる体制をこの 1 年半かけて進化してみたいかでしょうか。リアルもできるしオンラインでもミーティングしたりとかちょっとしたイベントができる、その併用できるみたいな活動にぜひ進化していただきたいなというふうに思います。

はい、最後残り 1 分くらいなので最後まとめです。最後のメッセージは 15 年ずっと市民活動とコミュニティ活動を見てきて、強いメッセージとして最後お話しします。形を変えても続けること、進化すること、情熱・想い・心のエネルギーがあれば今も活動は続いているし、これからも活動は続く。柔軟・進化の姿勢が大事だなと思います。

二つ目、自分たちの根本を見つめ直す形が変わっても残る自分たちの使命・価値って何だろうかという問いかけをしてみてください。何か問題意識があるから活動している、社会的役割があると思っている強みとか願いなど、そこが深く分かればいくらでもやり方を見つけていける。活動の形ってものにとらわれすぎないで、その根本みたいなものからもう一度作り直すということもできるかもしれません。

最後、中長期的な視野に立つこと。今、不安と混乱のさなか、2 年後には after コロナがやってきて、ミーティングもイベントも懇親会もできるようになるでしょう。人間と社会にとってコミュニティとつながりの重要性は変わりません。最初に言った通り、豊かなコミュニティと豊かなつながりがあることが、暮らしやすさ・生きやすさ、そして社会課題の解決につながる。そのために市民活動・コミュニティ活動はものすごく大事だと、その価値があるというふうには私は考えています。一緒に頑張れたら嬉しいなというふうに思います。

最後に宣伝になりますが、私 3 月に本を出しました。コミュニティマネジメントの教科書、今日の話とはちょっと違いますが、コミュニティの作り方に関する本を出版しています。ホームページから購入できますので、もしご関心ある方いたらぜひ探してみてください。以上で私の基調講演は終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

藤井：はい、呉さんありがとうございました。無理をしなくてメンバーを大切に、また少し、ちょっとだけでも

少しだけチャレンジしていく、そんなところが印象に残りました。改めて呉さんに会場の方は拍手をお願いします。ありがとうございます。

呉：音が聞こえると嬉しいですね。

藤井：ここで5分ほど休憩を入れたいと思います。トークセッションは細かいですけど14時21分から。20分頃ということでよろしくお願いします。また2部トークセッションは進行上ですね。Zoomで参加されている方は画面をオフにして下さいますようよろしくお願いいたします。それでは休憩に入ります。

藤井：続いてトークセッションに移ります。参加者をご紹介します。

1部に引き続きNPO法人CRファクトリーの呉さんです。

またVege & ArtFes（ベジアンドアートフェス）の中村ふみよさんです。

オーベルグランディオ川崎自治会さんの皆さんです。

川崎市職員プロジェクトチームの皆さんです。

画面入っていますかね。今会場では呼ばれた皆さんがギャラリービューで表示されているという感じですね。ではこの後 進行の方を千葉さんによろしくをお願いいたします。

千葉：ではトークセッションということで今呼びさせていただいた方々にまず話題提供をしていただきながら、それぞれどんな活動があって、今日のテーマに沿って質問をしたり、お互いにお話を投げ合ったりしていく時間としていきたいと思っております。まず最初にVege & ArtFesの中村さんから自己紹介的なことをお願いしたいと思います。まず自己紹介とプラスコロナ禍でどんな活動されてきたのかというようなことを短くご紹介いただければと思います。よろしくお願いします。

中村：はい、よろしくお願いします。Vege & ArtFesの中村です。コロナ禍で活動していたというのは、今までリアルで開催していたイベントをオンラインで開催するという試みをさせていただきました。よろしくお願いします。という感じですが大丈夫ですか？

千葉：スライドも含めてここで紹介をお願いしてもいいですか？

中村：はい分かりました。じゃあここで3分くらいで自己紹介ということで共有させていただきます。お願いします。スライド見れているでしょうか？Vege & ArtFesの中村です。ありがとうございます。

活動の始まりは高津区で始まりましたVege & ArtFesといいます。川崎の農家さんとママさんと、あと地元のお店と始めました。今では麻生区の方で活動・イベントをすることもあるので、年に1回高津区と麻生区で開催していたんですけど、今年になって開催できないということもあり、オンラインでベジフェスオンラインというネーミングに変えて開催をすることになりました。実際にVege & ArtFesではステージやマルシェ、あと野菜の販売をしていたので、それをどうオンラインに活かすかということで色々検討した結果、検討したといっても3週間で企画してイベント開催としたんですけど、ステージは今皆さんが見ているZoomの機能を使いました。カワサキアリスさんのご協力をいただいて、Zoom機能を使って子どもたちが芝居をするというステージを開催しました。マルシェの方はRemo（リモ）という機能を使って、1店舗1店舗が今見える1枠1枠にマルシェの出店をしていただいてマルシェの機能を開催しました。実際に野菜もオンラインで販売するというのをやってみました。続いてその後に8月にも小田急電鉄さんと一緒に小田急ファミリースマイルデーオンラインというものを開催して、ここには実際にオンラインに参加する人自体のチケットの購入が1,000人ぐらいいらっちゃって、実際に参加したのはやっぱりなかなかチケットを購入しても入って来られる方っていうのは半分以下になってしまうんですけど、オンラインで2回ほど大きいものを開催しました。私にとってのSNSの利用は基本的には本当に広報のみで使っていて、私はふらっと新百合ヶ丘というFacebookのグループを持っています。今1,000人くらいの方がいらっちゃって、新百合ヶ丘に住んでいる方も知っていたり好きだったり、本当に何かしら新百合ヶ丘に関わっている方に参加していただいています。本当にあくまでSNSは告知の場であり、コミュニティづくりの入口として考えています。私は本当は実際にはリアルの開催しかしたことがなくて、ふらっと新百合

ヶ丘は地元の農家さんと野菜に触れて遊んだり食育をしたり、色々活動をしていました。ちょっとパパッと写真を出させていただきます。あと市民団体のもう一つの活動としては、小田急の栗平で小田急のくらし部というものを立ち上げて、昨年からやっていたんですが、こどもしんぶん部とふらっとくり〜ん部というお掃除の部、ベジ活部という活動をしています。コロナ禍での開催として、実はこの中で止めたものよりも実は始まったものの方が多いのですが、毎月第3水曜日にリアルで開催している多世代交流居場所作りを麻生区の市民提案型事業でふらっとリビングというものを、実はこのコロナ禍で4月から始まったものです。テーブルや椅子をアルコール消毒したり、各所にアルコールの設置をしたり、各回90分で間を換気するとか、いろんなことを考えて今区と一緒に開催しています。換気と衛生の時間だったり、受付にて検温を行っております。そして11月も実は6・7日にはリアルのイベントの開催を考えていて、小田急のくらしマーケットというものが栗平にあります。でも実際にやっぱりオンラインのものの方がどんどん増えてきているんですけど、11月10日にはオンラインで100人カイギに出させていただきますので、もしよければこちらZoomなので見に来てください。11月21日はかわさきママLabo(ラボ)というものをオンラインでお仕事体験を開催します。12月19日は最後リアルになるんですけど、すいませんパパッとやるんですけど、まちづくりカフェかつというもので、リアルで人数制限をして私が講演させていただくということがあります。以上になります。早口だったんですが以上です。

千葉：ありがとうございます。オフラインでやっていた活動がコロナ禍でどんどんオンライン化も進んだけど、でも意外とオフラインの活動というのもコロナ禍で進んでいるということで、詳しくはまたあとでやりとりさせていただければと思います。

それではですね、次にオーベルグランディオさんの紹介をお願いいたします。

オーベル：はい、オーベルグランディオになります。すみませんが資料の方を映していただけるでしょうか。

オーベルグランディオ川崎 川崎市幸区神明町にあるマンションになります。マンション自体は430戸ある比較的大きなマンションですね、住民がだいたい40代から50代の世帯が多くて、自治体の活動なんか盛んにやっていますが、今年度はコロナの影響で活動が厳しい状況であって、そんな中でも一応自治会の活動だったりとか組合の有志が集まって今後の活動に向けて今検討しているというのが簡単な概要になります。こちら簡単なオーベルグランディオ川崎の中の組織の図なんですけれども、マンションなので管理組合の理事会っていうのがあります。資料の右上のところですね、左上に自治会っていうのがあって、うちのマンションが特徴的なのは、このマンション自体が一つの自治会になっています。その自治会の下に四つの下部組織と、あと一番最後、一番下にある班っていうのがあって、マンション内を班分けしていて、その班の単位で防犯パトロールなんかの活動を行うっていうようなことをしています。ちょっと分かりにくいかもしれないんですけども、カッコ内を書いてあるそんなに多くない人数ですが、これは各会の会員数ではなくて、そこの中の役員の数を書いています。役員の数がそここの数がある、10人、少ないところでは3~4名ですけど、多いところは10人とかそういう人数のいる組織になります。このマンションではどんなことをやっているかっていう年間活動をずらーっと書いたのがこれで、ちっちゃくて見えないですね。中身を全部見てほしいわけではなくてですね、いろんな活動していますよっていうボリューム感だけ見てほしくてずらっと書きました。簡単にざっくりというと、毎月定例でやっているミーティングというのがあります。それは自治会のミーティングだったりとかマンションの管理組合のミーティング、また下部組織でも一部ミーティングをやっているものもあります。それ以外にマンション全体でのイベント事ですね。1月に餅つき大会があったりとか、夏に夏祭りをやりますとか、あとマンション全体で大きめの防災訓練をやるとか、そういったことをやっています。コロナ禍における活動状況というところなんですけれども、一番最初に言うべきことを書いてなかったんですけど、基本的に3月になってからコロナの影響でいろんな活動が停止しています。イベントごとは基本的に全部中止になっていて、月例の会議も中止になっています。最初の千葉さんがお話しされたこととだいぶかぶっていてちょっと申

し訳ないんですけども、そんな中でどうしているかっていう話ですね。イベントごとに関しては正直なところ現在もまだ中止の状況が続いています。ただ月例の会議については改善をしていて、従来はマンションの共用施設の中で月例会議を行っていたんですけど、これが三密になってしまうので危険でしょうということで、4月から7月までは中止になっていました。そこを重要な決定事項は最初のうちは数人に絞ってやっていたんですけども、8月以降、7月かもしれないですけど、夏ぐらいからですね。我々マンションの近くに神明神社があるんですけども、その神社の社務所をお借りするようになります。これはマンションの共用施設よりも広い部屋なので、ここの部屋であれば人数を極端に絞らなくても三密を避けて打ち合わせができるということで、近くの他の団体さんのものをお借りすることで月例の会議を復活するということができています。その下のところ、防犯パトロールについてというところですけど、これは班ごとに行った活動として、従来は月に1回一つの班13名ぐらいが集まって防犯パトロールをしていたんですけども、これもやっぱり密になってしまうっていうので、こちらに関しては人数を絞るというのはそうなんですけど、絞って、だれど全員が参加できるように頻度を増やすという話ですね、これも呉さんのところで話がありましたかね。まさにそれを行っているようなものです。もともと1回13名だったのを2回に分けて7名前後に変更して、密にならないように防犯パトロールを実施するってことをしています。最後のところは今後の活動についてっていうところ書いていますけれども、今年度多くの活動が行事・イベントっていうのが中止になっているんですけど、今後はそれらの再開に向けてオンライン会議等を取り入れて、新しい生活様式に沿ったコミュニティ活動っていうものを模索していくっていうのを、今現在進行形で行っているというところになります。簡単にですけど紹介以上になります。

千葉：はい、ありがとうございます。オンラインの取組というのはこれから、まだやられてはいないって感じですかね。

オーベル：そうですね、これからですね。一部下部組織の方では資料の共有とかをオンラインにしていたりとか、連絡体制をオンラインのグループチャット作って、その中である程度話し合いを進めるということをしていてるところもあります。ただ全体ではまだそこまで進んでいないのが現状です。

千葉：はい、ありがとうございます。

では3番目に今度は川崎市職員プロジェクトチームということで、これは市の職員の方で取り組まれているということなんです。ではお願いします。

宮下：こんにちは、職員プロジェクトチームの事務局の宮下です。では画面を共有させていただいてお話しさせていただきます。私の方からはですね、職員プロジェクトチームの全体概要を説明させていただきまして、その後ですね、今日は各チームのメンバーに来ていただいていますので、取組を簡単に説明させていただきたいと思います。

まず最初に、「まちのひろば」創出職員プロジェクトチームとはなんぞやということで、「まちのひろば」がまちにあふれた川崎に向けて今取組を進めているところなんですけれども、職員自身のマインドもチェンジしていかなければいけないよねということを目的にですね、昨年度からスタートしました若手主体のプロジェクトチームになります。通常の業務に加えてですね、プラスアルファの取組として自ら手を挙げていただいたメンバーに参加いただいて取組を進めています。今年度はですね、4職種15名のメンバーで、テーマを「まちのひろば with 新しい生活様式」というテーマにさせていただきましてキックオフしております。コロナ禍で色々影響を受けまして、キックオフ自体もですね、かなり遅れてしまったところではあるんですけども、三つのチームに分かれて限られた時間の中でできることをですね、地域の方々ですとか企業の方々などと一緒にですね、コロナ禍におけるつながりづくりについてのモデル実践に取り組んでいるところでございます。

千葉：ここから三つのプロジェクトを紹介いただけるんですよ。

宮下：はい。今年度の取組としましては、それぞれオリジナルの視点で三つのチームで取組を進めています。こ

のあと簡単に説明させていただきますけれども、チーム1として川崎区小田の防災空地を中心とした「まちのひろば」づくり、チーム2として中原区下沼部のNEC公開空地を中心とした「まちのひろば」づくり、こちら1と2については昨年度の取組を深めた取組という形で進めています。またチーム3としましては本年度から新しいメンバーを中心とした幸区内における「まちのひろば」づくりという形で進めているところでございます。ではチーム1の方から簡単に説明させていただきます。

鈴木：こんにちは、川崎市の鈴木です。よろしくお願いいたします。

チーム1では「オダ プティ マルシェ」というイベントを企画してしまし、小田エリアってもともとまちの周りをぐるっと工場が囲んでいたようなエリアなんですけど、それが20~30年かけてすっかり工場がなくなって、全部ファミリー向けマンションに移り変わっています。でもやっぱりまちの中にはそのファミリー向けマンションに住んでいる人たちの姿があまりなくて、なんでかっていうとまち自体すごく昔からあるような良いまちなんですけども、その範囲の人たちが行きたくなる一般の人に刺さるようなコンテンツがまちの中にないので、ファミリー世帯などまちに増えている人たちが身近な地域を楽しめるように、素敵なお店があるマルシェをやろうと考えました。防災空地がこういう場所でやっぱりコロナ禍だからオープンスペースを使わなかったらもったいないかなと思っています。例えば川崎北部でとれた新鮮な地元野菜を見てもらったり、女性にも飲みやすいような市内のクラフトビールを置いてもらってちょっとおしゃれな雰囲気のマールシェをつくらうとしています。これを12月13日にやりますので、小田栄駅から徒歩1分ぐらいなのでよかったですら遊びに来てください。よろしくお願いいたします。

工藤：続いてチーム2の説明をさせていただきます。職員プロジェクト2班の工藤です。よろしくお願いいたします。NECさんの公開空地をどう活用していくかという取組をしているんですけども、昨年度は台風とかもあった中で10月に子ども向けのイベントをやって、それから地域の人たちとワークショップをやったというところがあります。ただその中でですね、実際もうちょっと使ってみないと使い方もアイデアもなかなか出しづらいよということがありまして、今年はコロナ禍もあってスタートもちょっと遅くなってしまっているんですけども、まずはちょっと小さな取組を積み重ねる中で、改めてこの場所の魅力であったりですね、どんな課題があるのかということをやっているところでございます。やってみました小さなアクションということで、10月20日にですね、まずは職員とNECさんの職員の方も含めてですね、ラジオ体操であったりヨガ体験というちっちゃな取組をちょっとやってみました。やっぱり人通りがちょっとなくて、体操とかだったら使いやすいとか、逆にトレイとかもないので、そこらへんはNECさんと調整する必要があるよねとか、やってみる中でリアルな課題だとかを出していきました。今後に向けてありますが、今年は視点を変えたアクションを積み重ねながら、実際活用に必要な情報を集めていくというところで、地域の体操グループと一緒に連携してやったりだとか、あとはNECさんとですね、川崎市にボッチャ部というボッチャという障害者の方も健常者の方も一緒になって楽しめる球技がありますので、そういったものをコラボしながらやっていくということを考えております。2班については以上でございます。

千葉：ありがとうございます。ちょっと待ってくださいね。スライドは先ほどの小田の防災空地の様子が今写っていて、これはそっちではスライドも進んでいて、会場に見えてないのかな。かもしれないですね。これもさっきの小田のスライドですね。今そちらの職員プロジェクトの皆さんが見えている画面はクラフトビールですか。タイムラグですかね。ではすみません、今見えているものは小田なんですけど、今中原まできました。見えているものと聞こえているものがズレながら進めていきたいと思います。では幸の話もお願いします。

前田：3班の方はスライドがあるわけではないので、説明させていただきます。職員プロジェクトの事務局をやっております協働・連携推進課職員の前田です。3班の方は今回身近な「まちのひろば」づくりに関心が高い職員が多かったのと、幸区の職員も多かったということで、幸区内における「まちのひろば」づくり

ってというのが何かできないかなということは今検討しているところです。やっていることとしてはですね、町内会の会長さんだったり、コミュニティカフェだったり、それから商店街だったり、こども食堂をやっている方にそれぞれヒアリングをさせていただいて、今こういう状況下でどういうニーズがあるのかっていうのをヒアリングなんかで寄らせていただいているってところです。これからやっていくこととしましては、一堂に会してっていうものではなくてですね、空地とかを使って、例えば写真を撮るようなスポットをつくったりとか、そういう共通体験みたいなものを通じてですね、何かつながりづくり、この状況下でのつながりづくりみたいなものできないかなっていうのを検討して、あとアイデア出しみたいなことをやっているところです。今後やるのが決まりましたらですね、また発信していきたいなと思いますので温かく見守っていただければと思います。よろしくお願いします。ありがとうございます。

千葉：なんか川崎区・幸区・中原区と南部によっけていますけど、南部によっけてるのは何か理由があるんですか？ たまたまですか？

宮下：たまたまですね。オリジナルの視点なので、本当にたまたまそのメンバーが見つけた感じですね。

千葉：今後ね、北部の方にも広がっていくことが期待されますね。ありがとうございます。

ではひと通り出演者というか皆さんの発表が終わりましたので、トークセッションに入っていきたいと思います。まずあらかじめこれを聞きたいみたいな事をちょっと整理していますので、そこから聞かせていただきたいなと思いますが、まずね、中村さんに伺いたいんですが、同じ今までやってきたイベントを昨年度まではリアルでやってきていて、今年度はオンラインで実施されたということで、オンラインとオフラインで参加者層の変化とか、あと企画段階でね、なんか苦労することがすごく変わった、こんなことに苦労することになるんだと思ったとかね、そういった違いをちょっと教えていただきたいなと思います。

中村：はい、中村です。オンラインの開催自体は実は私自身も初めてだったので、オンラインが初めての方が参加されるということも想定して、その初めての感覚をすごく大事にしました。参加者としては今まで Vege & ArtFes はやっぱり川崎に住んでいる方だったり、近くの方、あとふらっと寄る方がすごく多かったんですけど、川崎近隣だけではなくて本当に全国各地からオンラインに参加してくださったということが参加者層の違いかなと思っています。海外からも Instagram を見て体験してみたかったということで参加してくださった方がいらっやっていました。でもオンラインで開催するときにはすごくリアルと全然違うのが、説明会を何度もやったということと、あと勉強会も繰り返ししました。出店者さん自身がオンラインで出ることが初めてということがもうほぼほぼすべてだったので、出店者さんも初めてだったのでオンラインでどう物を販売するかとか、説明するかっていうところと一緒に勉強会を通して慣れていくということもしましたし、まずはオンラインに参加する目的を説明会で聞いて、それを残してオンラインで参加するときに売り上げを上げたいのか、それともまずオンラインに参入してみたいのか、どこにその人たちのゴールがあるのかというのを一番大事にしたというところは、本当に毎回実行委員はぶれずに、なぜオンラインで今回このイベントに参加しますかっていうところは初めに聞くようにしていました。打ち合わせとかも全てオンラインで、実は5月のたしか9日ぐらいにイベントをやろうと決めて、そのとき自粛中で外出ができない期間だったんですけど、イベントを開催すると決めたのが5月の31日に開催しよう。9日にやろうと思って31日なんで、だいたい3週間ぐらいでこの中で何ができるかという、1週間目は本当に基礎中の基礎の出店説明会と勉強会を始めて、2週間目ぐらいの時に広報を始めて、3週間目のところで勉強会の繰り返しという感じにしていました。オンラインとリアルの全くここが違うよっていうところを一つだけ最後にお伝えするとしたら、オンラインは事前に告知をして、この Zoom で参加するときの感覚と一緒になんですけど、事前に告知をしてそれに参加しますっていう方のみにはしか、やっぱりこの Zoom の ID はいかないんですよ。なのでいかに告知が大事かっていうふうになります。リアルのときはやっぱり通りすがりとか、なんか楽しそうなことがやっているっていつてふらっと立ち寄ることが多いんですけど、オンラインは例えばホームページとか SNS で流れてふらっと立ち寄ることもできるんですけど、

それもイコール広報だとしたら、いかに SNS の広報を知ってもらうようなことをずっと続けていないとふらっと立ち寄ることがオンラインでは難しいのかなと思います。今回はオンラインに参加して、すごくすごくチャレンジが大きくプレッシャーも大きかったんですけど、オンラインをやったことって本当に何一つマイナス点がなく、いろんなリアル良さもすごく分かりましたし、オンラインの大変さも知ったんですけど、オンラインでしか出会えない人たちもたくさんいたので、5月の自粛中にイベントを開催して、実は今もう11月になったんですけど、10月になってあのオンラインで初めて出会った人と初めてリアルで会うという、オンラインで初めまして、リアルがお久しぶりですみたいな、すごく不思議な感覚に今実はなっているので、オンラインも捨てたもんじゃないかなと。初めてのオンラインは本当に何かこうドキドキして、多分人にこう声をかけてもらえないとなかなか参入しづらいと思うんです。なので、例えばそのサポートに入ってくださいの方とか誰かお友達に誘われたりすると、苦手だからっていうのをちょっとだけ取っ払っていただいて、初めて同士でも「じゃあちょっと初めて同士と一緒に、1人は不安なんで2人でちょっと参加してみる？」とか、パソコンの前に2人で座って参加してみたり、そういうちょっとチャレンジをすると、新しい世界がもしかしたら見えてくるんじゃないかなっていうのは、本当にまだ私も5月にオンラインイベントを始めてまだまだ半年なので、まだまだ全然皆さんとほぼほぼ変わりがなくて大きいイベント2回やったっていうくらいなので、何かまた皆さんと川崎市内でコラボレーションしてオンラインのイベントができるといいなと思っています。すいません、長くなりました。

千葉：ありがとうございます。もう一つちょっと深掘りのことというか、今 Zoom でやっているじゃないですか。なので、こんな感じでみんなが顔が見えていて参加できるっていうイベントが比較的多いと思うんですけど、さっき見せていただいたあの Remo (リモ) ですかね。テーブルがたくさん並んでいるサービスの絵が映っていたと思うんですけど、テーブル1個1個に出店者がいて、そこでやり取りするってことですよね。

中村：はい、そうなんです。

千葉：ほぼほぼマルシェと同じ感じっていうことですね。そのあたりは本当に初めての人だとてんやわんやになるものだと思うし、本当に説明会を繰り返さないとういうふうには運営するんだとか、どう案内するんだとかすごく決めるのが大変だったんじゃないかなと思うんですが、どうでした。

中村：そうですね、リアルとまた違うところの一つ、Remo を使ったり Zoom を使うこともそうなんですけど、必ずトラブルシューティングの場所を置いておきました。何か困ったときにこの部屋に来てねとか、何か困ったことがあったらここに電話してねっていうような、何かこうちょっと困ったときのオンラインのときのオンラインサポートって実は一番難しく、オンラインでトラブルしているのにオンラインでサポートするって基本はちょっと難しいんですよ。パソコンの例えば実はまだ Windows7 を使っているとか、そこって買い換えてくださいとはそこでは言えないので、かなり難しいところがあるんですけど、あとはもうどこまでサポートするかを決めたり、出来る限り丁寧にオンラインのトラブルシューティングの部屋を準備するっていうところですね。Remo は本当に申し訳ないんですけど、私もチャレンジして思ったんですが、今となればスマホも iPhone だとかかなり新しいものだと入れるんですけど、ほとんど入れなかったり、パソコンが推奨されているので、Remo はやっていながら申し訳ないですが、まだまだ進めにくい機能かなと思っております。正直なところ、やっぱりオンラインの私たち実行委員最後の締め言葉は、オンラインであっても、リアルと同じようにふらっと立ち寄れるような、何も考えなくて立ち寄れるような入口、あまりストレスのかからない入口をできる限り運営側としてはつくっていくのがすごく大事ななっていうのは、やってみての学びでした。

千葉：ありがとうございます。本当にいろんなオンラインでも参加の仕方というのがどうもあるぞと。それを色々チャレンジして、これはいいけどこれは敷居が高かったとか色々実感されていると、ただ本当に今中村さんが言っていたように、チャレンジをするっていうことに関して本当にマイナス点がないって

う話があったので、ぜひその中村さんにみんなで聞いてみるとか、周りで出来る人と組んでやってみるとか、ぜひそのチャレンジのきっかけは色々深掘れるんじゃないかと感じました。

あとね、このイベントも今 YouTube でも配信しているので、これがオンラインでいうところのふらっと参加にもつながるのかもしれないし、いろんなやり方がきっとあるのかなと思いました。ありがとうございます。

千葉：はい、では次にオーベルグランディオ川崎自治会さんなんですが、コロナ禍でリアルな活動を行う上で普段と異なる調整とか発生して大変だったんじゃないかなというふうに思いますが、コロナで今までと活動が変わって大変だったことっていうのを、まずお聞かせいただけますでしょうか。

オーベル：もろもろ中止しているので、すごく色々あるかというところとパッとすぐ出てこないところはあるんですけど、引き継ぎとかそういうものは必ずやらなきゃいけないので、ちょうど3月であつたりとか、この前の10月とかに役員の引き継ぎみたいなことがあつたんですね。そのときにこれらどうしましようかっていうので色々調整させてもらっているんですけども、基本的には引き継ぎっていうのはオンラインでやるには難しい。紙とかだけで渡して引き継ぐっていうのも難しいので、結論としては会合でやっているんですね。下部組織のちっちゃいものであれば普通に人数絞れるので、その中で会合でやる。ただちょっと心配ごとがあって、人によっては人数絞っても換気ができる場所であっても出たくないかなっていうところを心配はしていたんですけど、やっぱりものの必要性とか十分に話ができている、こういう対策きちんと取るよって話ができると、そこらへんはあまり困らないっていうのはあります。特に嫌がる人もいるわけでもなく開催できています。もう一つ、班長の引き継ぎみたいのがあつたんですけど、これはかなり人数が多いんです。こっちに関してはさすがに会合で一気にやるのはできなかったの、いつもと違っていつもは1回でやるものを3回に区切ってやるっていうことをしていますね。さらにこの班長の引き継ぎをするときに区の方に来ていただいて、マンションの美化活動とか、ゴミ出しの仕方とかのセミナーとかを毎年していただいているんですよ。そこも区役所の方に相談させていただいて3回に分けてもらう。それは区の方がきちんとすぐに承諾してくれたから実現できたんですけど、なのでわりと相談したら皆さん協力的だったので、そういう意味ではそこまで苦労はしてないかもしれないです。

千葉：ありがとうございます。最初の話提供のところで藤井課長も町会の活動がほとんど中止になって、オーベルグランディオさんもね、中止っていう話だったんですけど、本当に私も町内会の活動のいろんな応援をする活動をしているんですけど、ほぼ中止で活動ができていない。まちの人ってどうなんですかね？その活動がないってことに対して、心配だとか不安だとかやってほしいとかそういう声は聞かれることありますか。オーベルさんお願いします。

オーベル：皆さんどうですか、ちょっと中の話聞かせてください。そういう話って出ます？やってほしいっていう話とかありますか？

オーベル：現状、そんなに強くやってほしいっていうのが出てくることってそんなにないかもしれないです。ただ理事会とかみたいにマンションの運営を決定しないといけないようなものに関しては必ずやらないといけないので、それらについてはなるべく早くやりましようっていうような話はあつたかなっていう認識ですね。

オーベル：今はそんなにないよね。

千葉：藤井課長の町会はどうですか？

藤井：さっきの呉さんの話にもありましたが、正直オーベルさんもそうですけれども、感じ方がやっぱり皆さん違うっていうのが前提にあります。そのうえで、やっぱりもしかしたら私のアレかもしれないんですけども、改めて会う機会がやっぱり大切なんだっていうのは、やっぱりやってみて、集まってみてこう感じたところがあります。ちょっと答えになっているかアレなんですけれども。

千葉：そうですね。私昨日聞いた話では、例えば駄菓子屋みたいなものを開いて、一時的に子どもたちに場を

提供するとか、ちょっとでもやっぱりずっと家の中にいるとか、なかなか地域の人が顔を合わせられないってことで、町会で何ができるのかってすごい悶々とされているのがあっちゃこっちゃで聞こえてきたんでちょっと聞かせていただきました。じゃあ、もう一つお願いしたいんですけど、新しいチャレンジとしてオンラインもやっていきたいっていう話があったんで、どんなふうにとか、ちょっとこんな展開したいっていうのがあったら教えていただきたいと思います。

オーベル：イベント事まではあまり検討できなくて。どっちかっていうと定期的なミーティングの方ですね。こっちの方にまずはオンラインを入れていきたいっていうふうに考えているんですけど、単純にいきなり全部オンラインにするっていうのは難しいかなと思っていて、ハイブリッドにやる必要があるでしょうと。今言ったハイブリッドっていうのは、さっきの呉さんの言ったハイブリッドとちょっと違って、オンラインと会合を切り分けてやるっていうわけではなくてですね、オンラインで入る人と会合で入る人と両方を用意すれば、今日みたいな感じで会場に人がいる、だけどオンラインで入る人もいるっていうのをまずは試行する。試行していこうかなと思ってのですね。やっぱり環境がそろってないって人もいるでしょうし、どうしても苦手意識のある人、あともしかするとあまり経験のない人、オンラインで会議やるとこんな感じになるんだっていうのは、慣れた人の方がやっぱりやりやすいじゃないですか。話に入るタイミングとかコツとかってありますよね。うまくつながらなかったときどうするかとか、そういったところをやっぱり仕事とかでオンラインで打ち合わせしている人たちは慣れているので、そういう人たちにあえてオンラインから入ってもらって、慣れていない人はその場の会合の場に参加してもらって、感覚を知ってもらってるところから始めようかなっていうのを試行し始めようというところを考えています。

千葉：ありがとうございます。我々も今開催していますが、未だ慣れてやっているとよりは本当に今 Zoom で見ている人はどんな気分で見ているのかとか、来場している人の顔は見えているからこうだとかっていう、両方の温度を見ながらっていうのはなかなか難しいですね。でもやっていくと分かっていくこともあるのかなとも思いました。

千葉：他の方でオーベルさんに聞いてみたいってことがある方いらっしゃいますか。はい、中村さん。

中村：Vege & ArtFes 中村です。オーベルさんに質問させてください。私自身も本当にコロナ禍でありながら多世代交流型居場所を始めまして、ふらっとリビングというものを始めたのですが、実は自治会の方が多世代交流のシニアの部分を実は担ってくださっていて、地域の方々と地元の地域の子どもたちが出会える場がオーベルさんのようにマンションではなくてあまりちょっと少なくですね、私自身も地元が山口だったりするので、なかなか多世代で交流することができないので、その中でコロナの前と後で自治会の方とかちょっと高齢の方とかに気を使う変化がもしあれば、簡単にでも教えていただきたいなと思うんですけど。

オーベル：そうですね、イベントごとは結構まるっと中止になっているので、多世代の方が一堂に会するような場自体はあんまりないですね。ちょっと違う話になっちゃうかもしれないですけど、今までだったら情報のやり取りなんかは回覧板を回したりもあるんですけど、それも止めたりしているんで、そもそも情報が行き渡らないとかっていうところが心配事であったりして、その辺をマンションの掲示物を出す場所が何箇所かあるんですけど、そういうところに今までより多く情報を出しましょうとか、そういうので全く疎にはならないようにしたいかなっていうのは考えたりはしているんですけども…ということくらいですかね。なのでやっぱりイベント事がないと、そこでこう多世代の方が会うっていうのがないから、その辺に関してはちょっとすいません、私たちの方からあまり言えるところがないかなっていう感じはしますね。

逆になんかさっきのふらっとリビングをやったときの効果とか問題点とか、そういう情報とかあれば教えていただけると我々も持ち帰れるのですがどうですか？

中村：ありがとうございます。私の方で参考になるか分からないんですけど、ふらっとリビングは毎月第2水

曜日に行っているんですけど、参加者をやはり特定しないといけなくなってしまって、登録制であり、さらに参加表明はLINE@（ライン アット）のやりとりでするようになりました。なので、自治会の方も実はLINE@の一斉配信から返事をもらうってことをする必要があって、関わってくださっている方に一応説明会をしたときにLINEの使い方のちっちゃい講座をさせていただいて、配信をして、もしお手伝いいただけるときはLINEでご連絡くださいみたいな形にさせていただいて密に連絡を取るといふか。私はすいません、掲示板ではなくSNSを使ってしまったのですが、なんか意外と居場所のためのLINE@を使って必ず同じ情報を手に入れるためにきちんと説明すると、新しい機能をすごく楽しんでくださる元気なシニアの方がやっぱり多いなっていうところがあって、あまりシニアシニアってなんか私の中でシニアってあんまりちょっと言葉あってないなと思うくらい皆さんすごくお元気で、あとは本当に発熱されていたりする方は全然無理していただかなくて良かったり、ただただ私が気になるのが本当に子どもとその多世代シニアの方が一緒に空間のときに本当にいいのかなと思いつつも、徹底的に衛生の方は気をつけているという…

千葉：音声会場が止まっていて、オンライン上は皆さん聞こえている？

すみません、一瞬会場が止まりました。これもあるあるでこういうことがあります、はい。

中村：大丈夫です。オーベルさん私回答あっていましたか？

オーベル：はい、大変為になりました。こちらでも持ち帰って試せることあるかなっていうふう感じたので。

はい、持ち帰らせていただきたいなと思います。ありがとうございます。

すみません、質問に質問で返してしまって。

千葉：ありがとうございます。結果として二つ答えがあったじゃないですか。やはりオンラインでやれるっていうときに、そのLINE@を使うことも苦ではないシニアの方もいるし、でもそれがやっぱり苦だっていう人は多分現れてこないのかもしれないってこともありますよね。やっぱりアナログの掲示板にいつもより掲示をしていこうってやっぱりすごく大事なことだと思っていて、どこで情報が取れるのかっていうのは、今まで以上に特にアナログとか紙とか貼ってあるのかってこともめちゃくちゃ大事なんじゃないかなと思ったんで、それをやっぱり自治会さんが大切に思うってことが、まずすごく情報のライフラインになるのかなと思ったんで、二つともすごく大事なことをいただきました。

これを機に中村さんとオーベルさんと少しつながって情報交流していただけるとよりいいなというふうに思いました。

ではですね、もう一つ川崎市職員チームについてです。まず面白いなっていう、私が面白いって言っているのか分かんないですけど、その「まちのひろば」をつくらう、あるいは見いだそうというのがこの川崎市が取り組んでいることだと思うんですけど、それはつくるだけではなくて、今ある「まちのひろば」ってたくさんあるよね、ここもそうだよなっていうことをみんなで発見していくことかなと思ったんだけど、例えば防災の空地であるとか、あるいはビル・マンションとかにもたくさんある公開空地っていうひろばになっているところ、これは使って良いてあんまり普通の人が思わないんだけど、いざ使ってみようとするのを先陣を切って若手の職員がやっているっていうのは、すごく面白いなというふうに思いました。ただずっと職員がやっていることではないでしょうから、どういうふうにその場所でやっているひろばの活動を地域の人たち住民の皆さんに渡していくのかみたいなことについて、ちょっとお話を伺いたいなと思います。宮下さんでいいのかな？

宮下：では1班の取組から鈴木さん、お願いします。

鈴木：鈴木です。もともとこの職員プロジェクトチームも手挙げ式で市の職員が入っているんですけど、元からある仕事は100パーセント残ったままやっているんで、そういう意味ではちょっと変わり者がやっているのと。

千葉：良いですよ、そういうの。

鈴木：そういう意味では、行政職員としてどうか、行政としてどうかという割り切り方はあまり自分としてはなくて、どちらかという市民側としてやっているから、自分の人生の中の時間でもともとこのエリアと関わりたいと思ったところからスタート地点にあって、自分がやりたいこととまちのなかでやるべきことっていうのを考えてこれを行っているの、そのうえでたまたま「まちのひろば」の施策的な話とか職員プロジェクトチームっていうものがある、たまたま手を挙げてそこに乗っているという感じなので、行政的な立場がなくなればそのまま一市民としてこの活動が続けるというような気持ちでやっているの、そういう意味では最初にご質問いただいたような課題というか、論点ってというのが自分の中では存在してないかなっていう変な回答ですけど。

千葉：いや、すごく良いですね。そういう意味では今までは行政マンと地域っていう、要するに私の質問がすごく昔ながらの質問だっただけで、職員さんもこれは大事だと思うチャレンジがしやすい環境が今起こっているのかもしれないし、その結果、現場で起こっているチャレンジがどんどん地域に広がっていくっていうことをこの事業でも支援できますよね。そういうことがすごく起こっているんだということが実感出来たんでとても良いなと思いました。

もう一つは、2班でNECの公開空地を中心に活動されているってことで、市民に広く活用していただくための周知とか使用するルールとか、要するに使って良くなっていても自由っていうことになっちゃうと多分NECさんも困っちゃう。それをどういうふうに調整していくのかというちょっとテクニカルな話ですけど、どうお考えか教えてください。

工藤：2班の工藤です。よろしくお願いします。今お話しいただいた通りですね、もともと公開空地なんですけれども、企業さんの敷地の中なので、もともとのベースのルールは結構厳しめに設定されているんですね。それに対して地域の方々から使いたいよという要望だとか希望があって、それに対して企業さんからも上からルールを被せていくというのはやっぱりちょっと上手くいかないのかなと思っておりまして、今年の小さいアクションを積み重ねていくっていうのも、積み重ねていく中で地域の人にも入ってもらって、じゃあこういう使い方ができるかというのを、実際使ってみた中での希望だったりだとかを言ってもらって、それを一緒に企業さんも使いながら考えていくっていう場をつくりたいなというふうに思っています。

千葉：ありがとうございます。そういう意味では、そのやり方ってものが今後他の場所で同じことをやろうとしたときに、すごく役に立つプロセスのデザインになるかもしれないということですよ。

はい、3班はこれからということで、質問というよりは幸区自体にいろんな「まちのひろば」的なものができているまちかなというふうに思いますので、そこがうまくスポットが当たってくると面白いななんてちょっと聞いていて思いました。ありがとうございます。

一旦ここで呉さんの方にコメントをいただきたいなと思います。よろしいですか。

呉：色々ありすぎてちょっと時間に収まらないなという感じがしながら、すごいかつまんで。オーベルさんとVege & ArtFesの中村さんの共通点として思ったのが、頻度を上げるっていうのが一つキーワードになってくると思いました。私の中でも話しましたが、オンライン時代にオンラインで何かをしていくっていうときに、よく単純接触の理論とかっていうのを聞いたことある人いると思うんですけども、恋愛の話でいうと、すごく華々しい誕生日プレゼントよりも毎日の電話とかの方がやっぱり愛着が湧きみたいなお話っていうのはとても有名な話の一つですけども、やはりこう頻度を上げて短くてもいいから何回か何回か接点を持つということはどうしてくれるかっていうのは、なかなかこう接触が難しい、対面接触が難しいこの時代においては、電話も含めてですね、できるだけ短めの単純接触の頻度を上げるっていうところは一つキーポイントになるかなという気がするの、今この半年経ってコロナ禍で調子が良い人もいるし、ちょっと調子を崩していたり、調子の悪い人も中には居ると思うんですよ。調子を崩していたり、悪い人ほど声を上げにくくて隠れてしまっているということもなんとなくあるんじゃないかなと薄々私は感じていて、やっぱり人が会うこととか話すことっていうのはこれほど大事なんだということを皆さんコロ

ナによって更に再確認したと思います。だからこそ何かしら手を替え品を替えですが、非対面になってしまいうけど、電話とかオンラインで接触を増やすことによって心が動いていくとか、あるいはコミュニケーションが生まれてくるとか、それで関係性ができてきて何か活動がより動いてくるといふことがあるような気がするので、この頻度とか単純接触の量かな、みたいなところちょっとポイントだなというふうに思いますし、あと1個だけマニアックな話をすると、やっぱり説明会の時代だなと私はオンラインはすごく思っていて、中村さんが説明会をたくさんやっただと言っていました、私たちもものすごい説明会をやっています。リアルするときにはやってなかったとか、数が少なかったんですけども、すごく説明会を今年は増やしました。理由は簡単で、私は川崎に住んでいながらオフィスは田町の三田にあるんですね。そこに行くのにやっぱりドア to ドアで1時間近くかかります。みんなで集まって会議室予約して説明会をやって一人も来ないみたいなことがよくあります。とてもコストがかかるんですね。でもオンラインはZoomを開放して10回とか来なくても全然平気な感じだったりするので、チャットの方にもありましたけども、新たな参加者・メンバーを募るって意味もそうだし、イベントをやるときとかにその今の頻度を上げることとか説明会みたいな場で、本当にちょっとだけ2~3人としゃべるみたいなことを積み重ねて、20人30人の人と会っていくみたいなことがすごくやりやすいっていうのは本当にニューノーマルだなと思いますね。他にもあるんですけどちょっと一旦ここまでにしておきます。

千葉：ありがとうございます。やっぱり頻度を上げるっていうこと、そして説明会の時代ということで新たに会う人、関わる人に対してそれも会うということの一環になりますよね。説明会を増やしていくというふうにいただきました。

では質問を。実はですね会場からいただいている付箋もあるし、チャットからいただいているものもちょっと書き出してこっちに貼らせていただいているんで、ちょっと読み上げていきたいと思います。

小林：まずですね、オーベルグランディオ川崎自治会さんへということで、自治会にはどのぐらいの人数、割合で入っていますかっていうことと、入っていない方たちを取り込めるような活動はどんなものがありますか。どのように取り込んでいますかっていうご質問がありました。先ほど掲示板の活用という話もあったかと思うんですけども、それ以外に何かございましたらお願いします。

オーベル：自治会にはマンション430戸全員入っているんで、430人っていうとちょっと語弊があるかもしれないけど、2,000人ぐらい入っています。家族4~5人をかけるとそんなぐらいで。なので、入っていない方へどうしますかっていうのはすみません、入っていない方がいないので解がないです。

小林：全戸加入なんですね。

オーベル：そうです。

小林：はい、ありがとうございます。

あとVege & ArtFesさんになんですけども、リアルの場合どうしても人数を絞ってくるっていうことがあると思うんですけども、人数を絞って来られなかった方たちへのフォローなどはありますか？というご質問でした。

中村：ごめんなさい、途中音声がちよっとだけ…もう一度お願いします。

小林：リアルの場合での開催のときに、どうしてもコロナ禍ですと人数を絞ってくる、人数制限があると思うんですけども、その人数制限で来られなかった方たちへのフォローなどはありますか？

中村：質問をもしかしたら違う受け取り方をしているかもしれないんですけど、Vege & ArtFesは実は今年もコロナ禍でもオンラインしか開催してなくてですね、実際に開催しているのが、その多世代交流の居場所を人数制限しています。来る方のお名前とご住所と連絡先を必ず受け取るようにしているのと、運営人数も実はその施設の入る人数の半分で開催しているので、半分の人からスタッフと参加できる人数の割合を出して、今は一般の参加の方は15名で限定させていただいているのと、あと人数超えそうになったときにはその施設ではないところにスタッフが避けてもらうっていうのを結構にこまめにやっております。

小林：じゃあ、その施設ではないところでフォローしているということですね。

中村：そうですね、ふらっと来た方も施設には入らないで、施設ではないところで説明を行って登録してもらって人数の範囲内で入ってもらうということをしています。

小林：はい、ありがとうございます。

川崎市職員プロジェクトチームさんへなんですけれども、トイレのこともなんですけれども、少し屋根のあるような場づくりもこれから考えていかれますか？っていうご質問でした。

工藤：そうですね。2 班の工藤です。NEC さんの空地は基本的に屋根がない場所なので、そういった特性も見ながらですね、逆に密にならないといった良いところもあるんですけれども、基本的には天候に左右されるような場所になっております。今後 NEC さんとも話し合いの中で、屋内でも会議室など地域の方に開放できるようにしたりとか、そういう話も希望が多ければできるのかなと思っております。

小林：ありがとうございました。

ちょっと広いご質問になるんですけれども、どのチームの方へというわけではないんですけれども、オンライン化を進めるにあたり最低限のコストってどんな感じでしょうか？っていうご質問がきているんですけど、どなたにお答えいただくといいですかね。

千葉：中村さんが。

中村：Vege & ArtFes のときは Zoom の機能を有料の機能にして月 7,000 円と、Remo だと実はその時代は 200 人ぐらい 300 人ぐらい入れる規模で 1 万 5 千円で済んでいたんですけど、コロナ禍の需要が 2.5 倍ぐらいにオンライン機能が上がってしましまして、今は月に 5 万円ぐらい払わないといけなくなってしまったので、やはりそういうものを考えたら Zoom だけで行って Zoom をいくつか持ってお部屋をつくる、あとブレイクアウトをつくるか来る人数を縦に増やす、部屋の数を増やすか、収容人数を増やすっていう Zoom がおすすめです。なので 1 万円ぐらいで、1 万円以内で済みます。

小林：ありがとうございます。

千葉：要はこの Zoom っていうのも無料でできるんですけど、無料だと 40 分ですぐ終わりが来ちゃうんで、ちょっと有料会員になるのは少なくとも必要かもしれないとか、あと例えばこういう会場でやるのに通信が切れちゃったら大変ということで、もし遅めの回線なら少し速い回線にしたらいいかということもあります。今中村さんが言っていたシステムは、どっちかっていうと場所を家賃のようにオンラインに払わなきゃならなくてそれが結構高いということですよね。例えばマルシェをオンラインでやりたいとかってなってくると、ちょっとかからない費用が今まで以上にかかってくることもあるということで、まとめて 1 万円ぐらいかかるみたいな話でした。よろしいでしょうか。

あとはですね、大体今までのトークの中で答えが出ているので以上としたいと思います。

千葉：ということで振り返りなんですけど、軽く振り返ってまた呉さんから一言いただくって流れでよろしいですかね。今日ホワイトボード 2 枚で話の内容をメモさせていただきましたが、そもそも呉さんの活動っていうのが、社会課題っていうのを人と人とのつながりによって解決できるコミュニティ、皆さんがやられている市民活動とかね、そういう活動が実はコミュニティとか人のつながりづくりになり、社会課題先進国日本の活動の一助になるというふうにもそもそもスタートでいただいたと思います。でも with コロナになってミーティングができないとか、すごくこれが大事というか今すごく大事だと思っているのは、リアルの方をつくることへの認識の差、NHK でもねちょっと朝一でやっていたんですけど、いいじゃんやっちゃえよっていう人とやっぱり怖いって人の差が今この季節ってすごく大きくなっているのかなと思います。そういう中で、どういうふうに団体の中で気持ちを合わせていくのかっていうところのポイントがあるということで、前提や背景をすり合わせるとか、関係性をあたためるとか、気持ちの弱さを共有するみたいなことが大切で、その上で今日呉さんがさっきの質問のところでもありましたけど、頻度を上げてできるだけ小さな単位で場をつくっていくことが大事って話がすごく印象的でした。そしてオンラインが得意で

はないという人にきちっと手ほどきをする。それはオンラインではできないので、会って個別にリアルにやっていくことが大切というのがオンライン時代のこれからのキーポイントになるという話がこれも印象的でした。どう進めるのかというときに、やはりオンラインということにチャレンジしてみるものが大事という話があるのと同時に、リアルな場というのを安心な場にしていくための開き方っていうことをリアルでやるときには大切に考えていく必要があります、そしてオンラインとリアルな場のハイブリッドっていうのをどう進めていくのかということがこれからのキーになるのかなと思います。実際にコロナが落ち着いても、もしかしたらオンライン使えるかもしれないですね、ということもあるのかな。なので、形を変えて柔軟に対応しながら続けることを自分たちの根本を見つめ直す。そして中長期の視点ということで、来年とかっていうもっと大きな、もっと中長期のスケールで活動を見直していくことが大切というキーワードをいただきました。

Vege & ArtFesさん、要するに地域とのつながり、そして現場感がすごくある活動だったのかなと思いますが、それを思い切ってオンラインのチャレンジに切り替えた。でも一方で、実はオフラインの新しいつながりの場も両方チャレンジされていったと。チャレンジをしながら結構苦労もされたんだけど、結果として何一つマイナス点がないっていう言葉がものすごく印象的でした。オンラインでしか会えない人との出会いがあったり、そういうこともあるし、もしオンラインで会っていた人と今度はリアルで会えるということもまた新しいつながりになっていくということで、このチャレンジをする機会というのを先陣を切って進められている中村さんを見ながら、やってみたって思う人もいればいいなと思って聞いていましたし、あと本当にチャレンジをする場をつくる作り手の方になっていただくということもすごく大切だなと思いました。

オーベルグランディオ川崎自治会さんやあとその冒頭の藤井課長の話もあって、町内会自治会っていうのが本当に地域にとって地域を支える大切なコミュニティだと思うんですけど、その中でやはりほとんどの活動が中止されているというのは印象的で、すごく衝撃的な言葉ではありました。ただこの分散開催とか場を選んで、今までよりちょっと広い空間を使おうとか工夫をして、何もしないのではなくやれる工夫・努力をしていったという話がすごく印象的で、そしてオンライン会議っていうのをイベントでこう大々的に取り上げるというよりも、日々組織を機能させていくような会議を定期的にオンライン化していく。オンラインで入ればいい人はオンラインで入るし、対面やったら良い人は対面でやり、それを同時に開催できないかと今日のイベントのような感じで両方をつなぐということが大切、そういうことをやってみたらいいという話がありました。そして中村さんとオーベルさんのやりとりの中で、多世代型ということに対して出てきた言葉で、さっき私の申し上げたアナログ情報・掲示している情報がいかにオンラインを使わない人にとっては大切かということがありましたし、オンラインの方でも色々配慮しながら進めていくということがありました。あとトラブルシューティング、困ったとき・トラブルが起こったときにどうするかっていうことも大切だという話もありました。

そして職員チームは「まちのひろば」をつくっていいこうというときに、やっぱり一番聞いていて良いなと思ったのは、役所の職員としてやっているのではなくて、こういうことをやりたいと思ってやっているっていう立場で地域の人に関わり、場所づくりに関わっていくってことが、まずここで紹介されたことも素敵だと思いましたし、そういうつながりの中でどんどん今は南部ばかりですけど、北部でもそういう動きがどんどん広がっていくことも大切だし、職員としてやっているというわけではないならば、本当にいろんな場所づくりが広がっていけばいいなと。あとできっと紹介があると思いますけど、この「まちのひろば」っていうね、言葉をどんどんみんなで広げていくことができれば良いと思いました。屋根のある場所の開催も考えているということなんだけど、こんな時期だからこそ逆にオープンエアーというか、屋外でやるイベントっていうのがコロナ禍では結構有効な感じもするんで、その可能性をどんどん発信していただければなというのが私からの感想というか、振り返りです。

ということで、では呉さんに。

藤井：呉さん、お願いします。

呉：はい。じゃあ、皆さん今日はありがとうございました。色々ヒントだったり勇気がもらえる時間になっていたら嬉しいなと思います。最後に私の方からコミュニティは大事だっていう、これはずっとずっと私が信念に近いような形で最後のエンパワーメントということにしたいと思います。コミュニティ、それをつくるコミュニティ活動が大事ですね。活動が大事です。それは3人でも活動だし2人でも活動かもしれない。もしかしたら1人でも活動かもしれない。活動があることによっていろんな人が出会えたりとか、参加できたりとか、交流できたりとか、つながりができたりするっていう、その小さな、あるいは中くらいの大きないろんな活動があることによって地域ができていくっていうのもあるし、人の心がね、ほぐされていくということがあると思うので、今日参加いただいて少し怯んでいたりと、なんかこうちょっと先が見えないなと思っている方、私からあえて代弁的にやっぱりコミュニティ活動は本当に大事なので、ぜひ頑張りましょうということ。そしてなんかフリップみたいですけど、やっぱり長期戦だなと私は思っています。分かんないですけどね。ワクチンの開発が年度内にできたとしても、やはり行き渡るのにあれですから、2022年あたりが本当のafter コロナなんじゃないかと思ったときに、今止まっていたり手をこまねくという場面があるかもしれませんが、やはりあと1年半続くかもしれないっていうふうな立場に立ったときに、どうするかということはやはり一緒に考えていきたいなというふうに思っています。今日は中村さんに聞けなかったんですけど、after コロナのときでもオンラインやりますかっていう質問をちょっとしたいなと途中で思ったんですけども、多分中村さんはやりますって言いそうだなとっていて、やはりこの1年半かけて進化していくっていう市民活動とかコミュニティ活動は進化していくっていうチャレンジを我々みんなができたらいいなってすごく思うので、最後になりますが、やっぱりトライ & エラーですね。あとは慣れです。できないなって思うんだけどそんなことないですよ。やっぱりね、やってみるってということ。小さくまずやってみて、慣れてくると意外にできるってことが多いので、この状況下におけるリアルイベント、やっぱりその参加者名簿をつくったりとか消毒用意したりとか、なんかちょっと難しいなと思うけど、やってみると意外にできるんですよ。1回やると自信つきます。Zoomもそうだと思います。1回やってみるとミーティングやってみるとなかなか面白い・新鮮だっていう感じで、「みやまエコー」さんの60代70代80代の方々が一生懸命Zoomに慣れてきてくださっていたりします。ぜひ残りの1年半をかけて、なんか更にコミュニティ活動・市民活動がなんか進化していくってシナリオは、私はすごい素敵なシナリオだなというふうに思っているの。そうですね、はい。なんかやっぱりなかなか声を出せない、あるいは見えない課題も多分あると思うからこそ、見えない、声にならないものを見る力は大事だし、戻りますけど、やっぱりコミュニティ活動はすごく大事だと思うので、皆さんの足元からいろんなチャレンジをしていってほしいなと思います。今日はありがとうございました。

藤井：はい、ありがとうございました。皆さまもありがとうございました。名残惜しくはありますが、もう時間が正直押しちゃいました。すいません。

こちらからですね、閉会に向けて一つお願いと三つ告知があります。まず、アンケートのお願いです。会場の方はお手元にアンケートがあるので、出入口にある回収かごへ提出してください。オンラインの方は後ほどメールを送りますので、だいたい1週間くらい締切期限がありますので、よろしく願いいたします。また告知になりますが、「まちのひろば」ですね、いっぱい実はあるのかなというふうに考えています。もっともっとここに「まちのひろば」あるよっていう声をですね、ぜひ我々の方にお寄せいただいて、そうしたのですね、どんどんどんどん見えるように発信していきたいと思いますので、詳しくは配布の資料等や市のホームページにもありますので、よろしく願いいたします。また、最後に次回イベントのご案内になります。12月13日日曜日ですね、またコロナ禍の活動のヒントですとか、あるいはクラウドファンディングについて話し合う「カワサキコネクト」がございまして。こちらの方ももしよろしければご

参加をよろしくお願いいたします。

本当に今日の最後ということで、閉会として川崎市市民文化局コミュニティ推進部長の阿部からご挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

阿部：ただいま紹介いただきました川崎市役所コミュニティ推進部の阿部と申します。本日はご講演いただいた呉さん、それからトークセッションにご参加いただいた皆さま、本当にありがとうございました。また会場にいる皆さん、それとこの Zoom というものを通して見ている多数の皆さん、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。川崎市としましては、呉さんからお話があったその社会構造の課題に対して、まずは地域包括ケアの推進という形で取組を進めていくと。その中でコミュニティという活動が下支えになるんだという形で両輪として取り組んでいくということで今やっております。今日の呉さんのお話の中でも、このコロナ禍の中での活動ということ、まずはやってみてというふうなお話がありました。それを私たちとしても「じゃあ、やってください」ではなくて、「一緒にやりましょう」という思いでですね、今日のようなリアルとオンラインの同時開催ですとか、あと職員プロジェクトの推進ですとかやっていきたいと思います。これから皆さま方が様々活動していく中で、お困りごと等があれば、本当に福祉の世界では今助けてが言えないという状況に困っているというのがありますので、ぜひこのコミュニティの世界の中では、みんなが助けて困っているよって言い合える、そんな関係ができればいいなと思います。本日はどうもありがとうございました。

藤井：長時間にわたりご参加いただきありがとうございました。本日はこれをもちまして「まちのひろばフェス 2020 これからのコミュニティ活動を考えよう～with コロナ after コロナ～」を閉会いたします。皆さま、お疲れ様でした。ありがとうございました。